
刊行にあたって

国立歴史民俗博物館では1985年度から6年間にわたって特定研究「日本歴史における地域性の総合的研究」（研究代表者 土田直鎮）を、課題A「中・近世における東国と西国」、課題B「古代東国の地域的特性」、課題C「民俗の地域差と地域性」に分かれて共同研究することを企画し研究を進めた。私たちは課題Bの第3期にあたる1989・1990年度に、関東地方の縄文／弥生移行期の解明を目的にしてこの課題に迫ることにした。

私は歴博に赴任してきた当初から三浦半島の対岸の房総半島で弥生漁撈民の洞穴遺跡を発掘し、三浦半島との比較や交流について追究したいという希望をもち、西本豊弘氏といっしょに房総半島先端の洞穴をめぐり有望な候補地を探してまわったことがあった。しかし、ここを発掘してみたいという気持ちにさせる場所には遭遇しなかった。それらの場所が本当は良好な遺跡であったのであるが、そのことがわかったのは、その後、この地域での発掘を積極的に遂行した岡本東三氏（当時、千葉大学文学部）らの努力によってであった。

そのような次第で、私の関心は関東地方の縄文／弥生移行期の追究に移さざるをえなくなり、調査候補地も房総半島の内陸部に目を向けていった。そこで浮上したのが千葉県成田市荒海（あらうみ）にある荒海貝塚であった。この貝塚は、1960年～1964年間の3次にわたる西村正衛氏（当時、早稲田大学教育学部）の発掘調査で「関東における縄文式最後の貝塚」として知られていた。こうして、私たちは1989年秋と翌1990年の夏に発掘調査をおこなった。

関東地方の「縄文式最後」は弥生直前という意味でもある。西日本ではすでに水田をつくり稲作をおこなっていた。そのころの関東地方はどのような状況であったのか、この関心は荒海貝塚の発掘中そして発掘後も途切れることはなかった。しかし、私たちの怠慢から発掘報告書の刊行は遅れに遅れ、徒らに年月ばかりが過ぎてしまった。そこで、当初案を大幅に縮小して、内容に不備が多いことを承知しながら発掘調査者の責を果たすことにした。

調査終了後30年たち、参加者のうち学生だった人たちは、今はそれぞれの勤務先で中堅として活躍している。当時発掘にさいしてご協力いただいた地主の神山博さん一家、神山聰さん、山岡倫之助さん、地元に住む永嶋正春さん（当時、国立歴史民俗博物館研究部）をはじめ、暑い調査に参加し苦勞をともにした方々に対して、いまようやく報告書の刊行にいたったことを深くお詫びするとともに、当時のことを想い、あつくお礼申し上げたい。

2020年3月

共同研究代表者 国立歴史民俗博物館名誉教授

春成秀爾

例言

1. 本書は、千葉県成田市荒海字根田 212 番地（土地所有者 神山博）、213 番地（同 神山聰）、214、220 番地（同 山岡倫之助）に所在する荒海貝塚の発掘調査報告書である。
2. 荒海貝塚の発掘調査は、国立歴史民俗博物館が企画した特定研究「日本歴史における地域性の総合的研究」の課題 B「古代東国の地域性」の第 3 期に、「古代東国」が形成される以前の東日本の縄文／弥生時代の移行期の問題の解明を目標にして実施した。
3. 発掘調査は、1989 年 10 月 20 日～12 月 10 日、1990 年 7 月 9 日～9 月 7 日の 2 回にわたって実施した。第 1 次調査の面積は約 35m²、第 2 次調査の面積は約 195m²、ただし第 1 次調査区の下部の発掘を含んでいるので、実際に調査した総面積は約 195m²である。調査主体者は土田直鎮（国立歴史民俗博物館館長）、発掘担当者は春成秀爾（国立歴史民俗博物館助教授のち教授）である。
4. 発掘調査の実施にあたっては、土地所有者の神山博、神山聰、山岡倫之助氏の協力を得た。地元に住む永嶋正春氏（国立歴史民俗博物館助教授のち教授）の助力も大きかった。そして、共同研究のメンバー諸氏、諸大学の学生の労力なしにはありえなかった。本書の作成にあたっては、執筆者諸氏の努力があったことを記し、謝意をあらわしたい。
5. 本書第 1 章図 1 は田邊えり、図 3 は設楽まゆみが作成した。第 1 章・第 2 章の遺物の実測・トレースおよび版下の作成は、春成、設楽博己（国立歴史民俗博物館助手のち助教授）、猪狩晴子、熊倉あさ子、煙山郷子、設楽まゆみ、菅谷智也子、春高晴子、藤尾純江、藤島りえ、堀広海、結城みどり、宮武博子がおこなった。
6. 図版に使用した写真は、遺跡関係は設楽が撮影し、遺物は勝田徹（国立歴史民俗博物館博物館事業課記録担当）が撮影した。
7. 執筆分担については、目次および各自分担部分の文末に示した。
8. 編集は、特定研究「日本歴史における地域性の総合的研究」課題 B「古代東国の地域性」荒海貝塚発掘調査団が担当し、実際の作業は春成秀爾（現、国立歴史民俗博物館名誉教授）と設楽博己（現、東京大学大学院教授）が、小林青樹（現、奈良大学教授）の助力を得ておこなった。
9. 石器の石材の同定は、矢作健二氏（パリノ・サーヴェイ株式会社）に依る。
10. 今回の発掘品は国立歴史民俗博物館で保管している。